

言語教育における ユニバーサルデザイン化を考える

発題者

植村麻紀子さん(中国語・神田外語大学)

中川正臣さん(韓国語・目白大学)

山崎直樹さん(中国語・関西大学)

どんなに素晴らしいコレクションを持つ美術館があっても、入り口に巨大な「段差」があり、スロープもエレベーターもないという設計であれば、その美術館の中のリソースにアクセスできない人がいます。わたしたちは、わたしたちの仕事である言語教育を、「段差」のある玄関のように設計してこなかったと言えるでしょうか。この「段差」は肢体不自由や視聴覚の障害による「段差」だけを指すものではありません。学習者は教室での学習活動に対してもさまざまな嗜好を持っています。グループワークを好まない学習者もいれば、自己開示を好まない学習者もいる。他人の前で発表したり、絵や図を描いたり、歌を歌ったりすることを嫌悪する学習者もいるでしょう。

わたしたちがこれまで「平均的な学習者」(これは質的に平均的であるということではなく、実は量的に多数派であるということに過ぎない)のイメージに基づいて設計をしてきた言語教育は、実は、上記のような学習者にとって、越えることの困難な、あるいは不可能な「段差」となっているかもしれません。ここで大切なのは「バリアフリー」の視点でこの「段差」を解消することではなく、最大限可能な範囲で全ての人が使用することのできるユニバーサルデザイン化を言語教育の場において広げていくことだと考えます。

私たちは、言語教育におけるユニバーサルデザイン化を進めるためのひとつの方法が、「学びのユニバーサルデザイン・ガイドライン(Universal Design for Learning Guidelines version 2.0)」のようなフレームワークの開発と、そのフレームワークを活用し、問題意識を共有する教師がそれぞれの経験・知見を統合し、集合知を形成していくことだと考えます。

今回の月例会特別企画では、言語教育におけるユニバーサルデザイン化とはどうあるべきか、そしてそれを実現するために現状の「何を」、「どのように」変えていくべきかということについて、参加者の皆さまとディスカッションしてみたいと思います。

3月2日

金

18:00~19:45(多少延長あり)

早稲田大学早稲田キャンパス 22号館8階会議室

※申し込み不要、参加費無料。直接会場へお越しください。

※お問い合わせ: monthly@alce.jp

言語文化教育研究学会 月例会特別企画
2018年3月2日 早稲田大学早稲田キャンパス

言語教育におけるユニバーサルデザイン化を考える

発題者

植村麻紀子 (中国語教育・神田外語大学)

中川正臣 (韓国語教育・目白大学)

山崎直樹 (中国語教育・関西大学)

本日のディスカッションの流れ

- ・ 発題者それぞれがこのテーマに関心を持った経緯
- ・ 本日のディスカッションの焦点
- ・ 参加者の皆さまの事例と問題意識の共有
- ・ 言語教育におけるUD化に今、求められること

中川が言語教育におけるUD化を考えた経緯

- ・ 2011年に横浜市にある療育センターを訪問
- ・ ここにいる子供たちの外国語学習は、どのように保障されるのか？
- ・ ここにいる子供たちが（主に韓国語教育が行われている）
高校や大学で外国語を学ぶとき、自分は何ができるだろうか？

中川が言語教育におけるUD化を考えた経緯

- ・ある脳性麻痺の韓国語学習者の声（話してみよう韓国語 中高生東京大会 2018 フォトメッセージ 最優秀賞）
- ・自分が韓国語教師として、このような学習者が混在する教室において「今、何をしている」と言えるであろうか。「今後、何を実現する」と言えるであろうか。

中川が言語教育におけるUD化を考えた経緯

私たちが議論してきたテーマの一例

- 障害は個性か？
- 障害は誰にあるのか？（社会か個人か）
- 発達障害を持つ（あるいはその可能性のある）学習者の特性
- 発達障害と視覚、聴覚の問題
- 当事者性
- 特別支援教育とUD化
- UD化は誰のための行為なのか？

など

山崎が言語教育におけるUD化に関心を抱く理由

- (1) 情報保障
- (2) MPCL (Multi-Path Communication Literacy)
- (3) インクルージョン (Inclusion) とMPCL
- (4) 固定的なCan-do能力記述文の理不尽さ

〈情報保障〉の一環 (山崎の理由1)

1. 東日本の震災→「多言語災害情報ページ」を創設 (中国語学会サイト内)
2. 「日本語がわからない」障壁だけでなく「視覚・聴覚」の障壁を無くす情報保障へと関心が発展
3. 自閉症などによるコミュニケーション上の障壁を越えた情報保障へと関心が発展

大学の授業にアクセスするための保障

- センター試験はすでにさまざまな障害（発達障害なども含む）に配慮している。各大学の2次試験もそうなるであろう
- では、「配慮されて合格した人」は、入学後に、その大学のすべてのリソースにアクセスできるだろうか？

MPCL (Multi-Path Communication Literacy)

1. ふだん使っているコミュニケーションの経路がうまく機能しないときそれを代替できる経路を使うためのリテラシー（レパートリ、気づき、運用スキル、態度）
2. これは現代人に必須のリテラシーである
3. UDを意識するのもMPCLの一部と考えたい

インクルージョンとMPCL

1. インクルージョンが実現している教育の場はMPCLを身につけるのには理想的な環境
2. とくに、これまで障壁を感じてこなかった「多数派」が学べる機会
3. インクルージョンは障壁を感じていない多数派にこそ意味がある

固定的・具体的なCan-doの理不尽さ（例）

- ❖ 携帯番号やメールアドレスを、口頭で伝えあうことができる。
 - （『外国語学習のめやす』の中のコミュニケーション能力指標の例）
 - なぜ、「口頭で」と経路を限定されねばならないか

固定的・具体的なCan-doの理不尽さ（理由）

- ❑ 重要なのはこの指標の上位にある目標（＝何のために連絡先を伝えるか？）
- ❑ その上位の目標を達成するために「口頭」「対面」は必須なのか？
- ❑ 多数派の使用するコミュニケーションの経路を標準にした能力記述はこのようなさりげない不愉快な記述が多い

植村が言語教育におけるUD化に関心を抱いたキッカケ(1)

「発達障害」関連のテレビ番組

2017年5月21日NHKスペシャル

「発達障害～解明される未知の世界

「あさいち」の発達障害特集を見る

<http://www1.nhk.or.jp/asaichi/hattatsu/>



もしかしたら？

と思う学習者の姿が...

教育

Edu@asahi.com
金曜～月曜掲載

盲ろうの森さん 大学院へ



盲ろう者の大学院生森敦史さん。左手の感覚を手話を取りつて聞く「二乗感覚」は市、関田彰彦

経験もとに支援の形 研究

生まれたときから目が見えず、耳が聞こえない「盲ろう」として、2011年に国内で初め大学進学を果たした森敦史さん(28)が今春、大学院に進む。自らの経験を生かし、盲ろう者のコミュニケーション向上のために何が必要かを研究している。

森さんが通うのは、視覚や聴覚に障害のある学生のための国立大学「筑波技術大学」(茨城県つくば市)の大学院。90分の授業では、9人の手話通訳者と講義内容をノートに記録する人がつく。教授の学生と受ける講義では、教授がマイクで話した言葉を、遠隔地で文字入力して、森さんの手の端末に点字で打ち出される。

指導教員の佐藤正幸教授や白沢麻呂准教授の話は、片手用やアレンジした独自の手話に、森さんが左の手のひらで触れて理解する。自分の言葉は両手を使った手話で相に伝え、込み入ったことは点のキーボードとパソコンを連動させたチャット

不安を解くのは「つながり」
大学卒業後の進路を考えたと、就職や住居も選択が少なく、就労支援の少ない盲ろう者の働く場所や施設がないなら、自分がこれから作りたいと思った。大学院では、情報クセシビリテイを専攻し、盲ろう者のための生活支援を研究する。先行研究は少なく、今は米国の女性



教育実態を調査 1998年度以来

国内には盲ろうの子どもが学ぶ専門的な教育機関はない。盲学校やろう学校などの特別支援学校で学んでいる子どもも多いが、実態は把握できていない。国立特別支援教育総合研究所が1998年度に実施した調査では、未就学児を含め338人の盲ろうの子どもを確認した。同研究所は今年度、より詳しい実態調査に乗り出した。子どもの人数だけでなく、子どもたちがどんなコミュニケーション方法で学んでいるのか、また担当教師のニーズや研修実態についても把握を目指す。

筑波大付属視覚特別支援学校小学部で森敦史さんの担任も務めた同研究所上席総括研究員の星祐子さんは、「盲ろうの子どもが各地域で適切な教育を受けられる環境を整えるためにも、「盲ろう」という障害に対する認知度を上げ、知識のある教員を全国に増やしていきたい」と話す。

が書いた約3000字に及ぶ盲ろう者の支援のためのガイドラインの翻訳に取り組んでいる。目が見えない、耳が聞こえない世界は、常に不安や孤独と隣り合っていた。森さんは、それを解決してくれるのは「周りの人とのコミュニケーション」や「つながり」と言っている。目が見えない

研究成果として8月、これまでなかった「青い菊」の開発に成功したと発表しました。遺伝子組み換え技術で、青い花が咲く植物の遺伝子を導入し、色素の構造を変えました。農研機構上級研究員の野田尚信(なおのぶ)さんは「根気強く続けた成果」と言います。12日付の紙面で紹介する予定です。

東海 朝日小学生新聞
http://www.asagaku.com/

発達障害かどうかの確認は難しい。
だからこそ**障害の有無に関係なく、**
みなにわかりやすい

「授業のユニバーサルデザイン」を考
えてみたい。

取り組みのための多様な方法を提供しましょう

感情のネットワーク
「なぜ」学ぶのか



提示 (理解) のための多様な方法を提供しましょう

認知のネットワーク
「何を」学ぶのか



行動と表出のための多様な方法を提供しましょう

方略のネットワーク
「どのように」学ぶのか



アクセスする

興味を持つ のためのオプションを提供する (7)

- 個人々の選択や自主性を最適にする (7.1)
- 自分との関連性・価値・真実性を最適にする (7.2)
- 不安要素や気を散らすものを最小限にする (7.3)

知覚する のためのオプションを提供する (1)

- 情報の表し方をカスタマイズする方法を提供する (1.1)
- 聴覚情報を、代替の方法でも提供する (1.2)
- 視覚情報を、代替の方法でも提供する (1.3)

身体動作 のためのオプションを提供する (4)

- 応答様式や学習を進める方法を変える(4.1)
- 教具や支援テクノロジーへのアクセスを最適にする(4.2)

積み上げる

努力やがんばりを続ける のためのオプションを提供する (8)

- 目標や目的を目立たせる(8.1)
- チャレンジのレベルが最適となるよう(課題の)レベルやリソースを変える (8.2)
- 協働と仲間集団を育む (8.3)
- 習熟を助けるフィードバックを増大させる (8.4)

言語, 数式, 記号 のためのオプションを提供する (2)

- 語彙や記号をわかりやすく説明する(2.1)
- 構文や構造をわかりやすく説明する (2.2)
- 文字や数式や記号の読み下し方をサポートする (2.3)
- 別の言語でも理解を促す (2.4)
- 様々なメディアを使って図解する (2.5)

表出やコミュニケーション のためのオプションを提供する (5)

- コミュニケーションに多様な媒体を使う(5.1)
- 制作や作文に多様なツールを使う(5.2)
- 練習や実践での支援のレベルを段階的に調節して流暢性を伸ばす (5.3)

自分のものにする

自己調整 のためのオプションを提供する (9)

- モチベーションを高める期待や信念を持てるよう促す (9.1)
- 対処のスキルや方略を促進する(9.2)
- 自己評定と内省を伸ばす (9.3)

理解 のためのオプションを提供する (3)

- 背景となる知識を活性化または提供する (3.1)
- パターン、重要事項、全体像、関係を目立たせる (3.2)
- 情報処理、視覚化、操作の過程をガイドする (3.3)
- 学習の転移と級化を最大限にする (3.4)

実行機能 のためのオプションを提供する (6)

- 適切な目標を設定できるようガイドする (6.1)
- プランニングと方略の向上を支援する (6.2)
- 情報やリソースのマネジメントを促す (6.3)
- 進捗をモニターする力を高める(6.4)

ゴール

学びのエキスパートとは...

目的を持ち、やる気がある

いろいろな学習リソースや知識を活用できる

方略的で、目的に向けて学べる

言語教育のユニバーサルデザイン(UD)を考えるに至った経緯

以上のように、発題者3名が関心を抱いたきっかけや問題意識はそれぞれ異なるが、

最終的に目指すゴールとして

「言語教育のユニバーサルデザイン (UD) 化を考える」にいたったのはなぜか。

「言語教育のユニバーサルデザイン（UD）」とは？

UDはその使用者を選ばない。

「使う人が障害者であれ、健常者であれ、高齢者であれ、女性であれ、子供であれ、区別なくデザインするところに障害のある人たちを社会に含もうとする社会的動き」を創り出す（竹村, 2017:63）。

「言語教育のユニバーサルデザイン（UD）」とは？

UDの7原則（竹村, 2017:62）：

1. 誰であろうと公平に使えること
2. 使う上で自由度が高いこと
3. 使い方が簡単で分かりやすいこと
4. 必要な情報がすぐに理解できること
5. うっかりミスが、できる限り危険につながらないこと
6. 身体への過度な負担を必要とせず、少ない力でも使えること
7. 使いやすい十分な大きさと空間が確保されていること

UDは障害者だけのものではない

何人に対しても**教育の質を保障**するのは当然

例) 発達障害の学習者の場合、タスク管理がうまくできないと言われるが、タスク管理能力の欠如は定型発達の学習者にも多く見られる。

授業で教員の指示に遅れをとる学習者

→当該学生の能力や集中力の欠如のせいだけなのか？

障害は個人の属性なのか

障害は

＜社会（例えば教室、会社）＞と＜個人＞の関係性

にあると捉える。

社会が「障害」を作り出している？

「障害者」に「問題」や「障害」を抱え込ませた原因は、**社会のしくみの側にある**のだから、それを補填する責任が社会の側になって当然だろう。そのように社会の設計を変えるということは、「障害」を持った（持たされた）人がハンディを感じずにすむだけでなく、障害のない（と見なされる）人々にとっても、住みやすい社会となるはずだ。

なぜ「UD化」なのか

様々な学習者が混在するという事は、様々な特性が混在することを意味する。その特性は常に変化しうるものであり、これらをすべて把握し、UDに基づいた学習環境設計していくことは容易ではない。

だからこそ、可能な限り学習者に寄り添う「UD化」が求められる。

私たちが進めたいことは、言語教育における「UD化」である。

トップダウンとボトムアップ双方からのアプローチが必要

- 制度・システムの整備
- 教師ひとりひとりの教育観の問い直し、
および具体的な学習環境設計

本日のディスカッション

教育機関による支援の事例や問題

教育機関レベルの事例や問題

例：教育機関の教育理念、言語教育全体のカリキュラムなど

例：学生サポートや施設・機材提供、支援など

コースレベルの事例や問題

例：コースの目標や評価、シラバスなど

クラスレベルの事例や問題

例：教師の教育観、具体的な学習環境の設計、クラスの間関係の調整

本日のディスカッションの流れ

- ・ 発題者それぞれがこのテーマに関心を持った経緯
- ・ 本日のディスカッションの焦点
- ・ 参加者の皆さまの事例と問題意識の共有
- ・ 言語教育におけるUD化に今、求められること

今、ここ👉

参加者の皆さまの事例と問題意識の共有

グループディスカッション

- 言語教育におけるUD化に関わることで、皆さんは教育現場でどのような学習者と接しましたか。その事例について話してください。
- また、その事例を通して、皆さんが感じた問題意識についてグループで共有してください。

参加者の皆さまの事例と問題意識の共有

グループで話し合ったことを
全体共有してみましよう

参加者の皆さまの事例と問題意識の共有

言語教育におけるUD化に
今、求められること

本日のディスカッションの流れ

- ・ 発題者それぞれがこのテーマに関心を持った経緯
- ・ 本日のディスカッションの焦点
- ・ 参加者の皆さまの事例と問題意識の共有
- ・ 言語教育におけるUD化に今、求められること

今、ここ👉

UD化のための見取り図

UD化のための見取り図

- ❑ 誰が考えるのか？
 - ❑ 大学等の教育機関
 - ❑ カリキュラムやコースの設計をコーディネートする人たち
 - ❑ 個々の授業の構成を考える人たち
- ❑ 何を考えるのか？
 - ❑ 人的環境の改善
 - ❑ 機材・物理的環境の改善
 - ❑ 教育理念・教育目標の改善

	教育機関	カリキュラムやコースのコーディネイタ	個々の授業の担当者
人的環境	(1)	(4)	(7)
物理的環境	(2)	(5)	(8)
理念・目標	(3)	(6)	(9)

今日、考えていただきたいのは.....

	教育機関	カリキュラムやコースのコーディネイタ	個々の授業の担当者
人的環境	(1)	(4)	(7)
物理的環境	(2)	(5)	(8)
理念・目標	(3)	(6)	(9)

人的環境

【1】 各種障害等「学習の障壁」となる諸問題について、当事者および周囲の教職員・学生に対して専門的立場からアドバイスをを行い、サポートをする部局の設置。

【4】 ティーチング・アシスタント、ラーニング・アシスタント等の配備。

【7】 クラスメートが「困っている人たち」への理解を深められるような工夫。

物理的環境

【2】 いろいろな活動の補助をする建物レベルでの機材（スクリーン、プロジェクタ……）等の整備、施設自体のUD化。

【5】 実情に応じた教室（例：情報機器が使いやすい、グループ学習がしやすい……）の分配、個人レベルでの機材（情報端末等）の配備。UD化した教材の選択。

【8】 板書やプレゼンのなどの情報伝達の方法の改善など。

理念・目標

【3】 大学全体の3ポリシー（ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシー）を多様な学習者に対応できるように見直す、学部レベルで3ポリシーを見直す。

【6】 カリキュラムやコースの目標を、多様な学習者に対応できるように修正をする。何が最終的に達成されなければならないかを優先し、そこにいたる道筋の多様性を許容する。

【9】 毎回の授業の成果物についても、多様な学習者に対応できるように、柔軟な対応をする。目標は固定しても経路は固定しない、など。また、教室活動のUD化（当然のように4つのスキルを要求をしない、当然のように大勢の前でのパフォーマンスを求めない……）の促進など。

全体の見取り図

		誰が考えるのか？		
		大学等の教育機関	カリキュラムやコースの設計をコーディネートする人たち	個々の授業の構成を考える人たち
何を考えるか？	人的環境の改善	[1] 各種障害等「学習の障壁」となる諸問題について、当事者および周囲の教職員・学生に対して専門的立場からアドバイスを行い、サポートをする部局の設置。	[4] ティーチング・アシスタント、ラーニング・アシスタント等の配備。	[7] クラスメートが「困っている人たち」への理解を深められるような工夫。
	機材・物理的環境の改善	[2] いろいろな活動の補助をする建物レベルでの機材（スクリーン、プロジェクタ……）等の整備、施設自体のUD化。	[5] 実情に応じた教室（例：情報機器が使いやすい、グループ学習がしやすい……）の分配、個人レベルでの機材（情報端末等）の配備。UD化した教材の選択。	[8] 板書やプレゼンのなどの情報伝達の方法の改善など。
	教育理念・教育目標の改善	[3] 大学全体の3ポリシー（ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシー）を多様な学習者に対応できるように見直す、学部レベルで3ポリシーを見直す。	[6] カリキュラムやコースの目標を、多様な学習者に対応できるように修正をする。何が最終的に達成されなければならないかを優先し、そこにいたる道筋の多様性を許容する。	[9] 毎回の授業の成果物についても、多様な学習者に対応できるように、柔軟な対応をする。目標は固定しても経路は固定しない、など。また、教室活動のUD化（当然のように4つのスキルを要求をしない、当然のように大勢の前でのパフォーマンスを求めない……）の促進など。

〈すべての学習者〉の 学びを保障するために 我々は何を変えるべき か

2018年3月31日

10:00~17:00

関西大学千里山キャン
パス岩崎記念館F401

外国語授業実践フォーラム第15回会合

研究集会

〈すべての学習者〉の学びを保障するために 我々は何を変えるべきか

10:00~10:35 受付
10:30~11:00 趣旨説明

11:00~12:30 【講演】「スマート・インクルージョンという発想」—インクルー
シブ教育が日本を変える！／竹村和浩（ビジネスブレイクスルー大学）

12:40~13:30 昼休み

13:30~15:00 【講演】特別支援からユニバーサルデザインへ—英語教育で目指し
たいこと／村上加代子（神戸山手短期大学）

15:10~16:40 座談会／ディスカッション（村上加代子、古屋憲章、松田真希子、
住田環、田原憲和、中川正臣）

16:40~17:00 事務連絡・閉会の挨拶
17:30~18:30 お茶会（懇親、情報交換）

言語教育の現場では、様々な背景を持つ学習者とかかわる機会が増えてきています。

私たちが言語教育関係者は、〈すべての学習者〉に対し、どのように向き合い、いかなる教育実践を目指していくべきか。また、そのために現状の何を変えていくべきでしょうか。

日時：2018年3月31日（土）

場所：関西大学千里山キャンパス岩崎記念館F401

会合参加費：1500円（資料代含む）

参加者：すべての言語教育関係者（家庭教育、学校教育、大学教育、生涯教育など）に開かれています。外国語授業実践フォーラムの会員でなくても参加できます。外国語授業実践フォーラム2017年度会費を払われた方は資料代500円のみいただきます。

定員：70名（事前申し込みをお願いします）

お茶会の費用：参加希望者は別途500円が必要です。

会場の都合で事前の申込をお願いしております

お子様等の同伴を希望されるかたは下記よりご相談ください

詳細・申込・連絡は <https://incl-lg.wikispaces.com/event01>



INCL

言語教育におけるインクルージョンを考える (通称：インクル/INCL)

<https://incl-lg.wikispaces.com/>

INCL

Search

言語教育におけるインクルージョンを考える

このページの内容

- 催し物のお知らせ
- 各種リソース (参考文献、推薦書目、ウェブ上のリソースへのリンクなど)
- このサイトについて
- 連絡先

本日は誠にありがとうございました